「アフガン復興、エイズ…世界的課題と向き合った」

フロントランナー Front Runner

（b1面から続く）

武内 紀子さん　コングレ社長

――会議や展示会、博覧会を運営する仕事があるとは知りませんでした。

「知られざる業界」ながら、とても魅力的な仕事です。たとえば来春は、小型無人飛行機「ドローン」に関する日本初の本格的な国際展示会を共催します。社会問題にもなる一方、「空の産業革命」として成長が期待される分野。そんな時代の最先端と現場で向き合えるのは、刺激的です。

――大規模な国際会議など、難題をこなせる強みは何ですか。

IMF・世銀総会の運営では、限られた時間と予算のなか、各分野の専門家集団と強い絆で結ばれた「チーム・コングレ」を組み、限界を突破しました。その際、「何が起きても、最終責任は当社が負う」という姿勢で努力を重ねることで、信頼関係を築けたと思います。

――各界の一流の人たちと一緒に働けるのは、うらやましいですね。

私はやはり、人が好き。この仕事の面白さは、国内外の様々な人と会い、未知の世界に触れられることです。人脈を広げることは、仕事を広げる財産でもある。運営の「技量」が高まるだけでなく、取り組む「分野」も拡大する。出会った方々に育てていただきながら、貢献もでき、一生のお付き合いになります。

「欧米に対抗」

――国際会議の誘致は経済振興策としても注目されています。

国際会議の年間開催件数は、日本がアジアで1位ですが、近年はシンガポールや中国、韓国が追い上げています。世界におけるアジアのシェアは拡大していますが、日本の地位は下がっている。

また、世界展開をする欧米の大手業者などは、学会や産業界の国際機関と包括的な契約を結んで、会議や展示会だけでなく、事務局の運営そのものを担います。対抗するのは大変ですが、まずは日本で国際機関の「アジア本部」を誘致し、事務局の受託を獲得したい。可能性はあります。そのためにも、業界をはじめ関係者の一体となった活動が欠かせません。

――今春、業界組織もつくりました。

国内最大の業界団体「日本コンベンション協会」（JCMA）が発足しました。約200の事業者が集い、技能の向上やサービスの標準化、政府との協調などで、国際競争力を高めます。若い優秀な人材が集まることも期待しています。

ドラマチック

――業界全体の認知度を高めたいですね。

ウェディングプランナーやホテルマンを主人公にしたTVドラマや映画が、たくさんありますよね。私たちの業界も、そうした作品の立派な舞台になりますよ。国際会議の裏側をドラマチックに描いていただけたら、うれしいな。

それだけの深みがある仕事です。誘致から企画運営、そして収支決算まで激動の日々です。

――会社のこれからの目標は？

外部にあるものの「誘致」だけでなく、私たちの内側から「創造」「発信」していきたい。そのためには、スタッフが日々の仕事をこなしながら、自分で学び、力をつけないと。企画も出してほしいし、ネットワークも広げてほしい。そのためにも、時間的な余裕を持たせたい。社長としての課題です。

――働いて成長できる。うれしいことですね。

これまで多くの世界的な課題と向き合ってきました。アフガニスタンの復興支援国際会議もあったし、エボラ出血熱やエイズなど難病の国際会議もありました。様々なテーマに対して、我々も自分の専門分野から貢献でき、最前線の取り組みをサポートして、喜んでもいただける。働きがいがあります。

――コングレもまた、専門家集団ですね。

ITシステムの専門会社や、通訳・翻訳の会社、国際会議や展示会などに関するシンクタンクなどが、グループ会社にあります。自社運営のホールや会議室、レストランもあります。どんなご要望にも、グループ内でしっかりと対応できるように、態勢を整え、スキルを磨いています。

――武内さん自身は疲れを知らないタイプですか。

あはは。でも実際、いましばらくは仕事が100％ですね。社長という大きな役割をいただいてまだ2年。いまはこれを全力でやらなければと覚悟を決めています。強さと優しさを両立させたい。会社も、そして自分自身も。その先には、女性社員のロールモデル（手本）になれるようにと思いますけれど。

自社がプロデュースするカフェで、社員と打ち合わせ＝東京都中野区

プロフィル

★1963年、北九州市生まれ。父の仕事の都合で、すぐ愛知へ。小学校時代は大分の自然の中でのびのび育ち、6年の途中から大阪へ。以降、社会人10年目まで、大阪がベース。

★中学・高校時代は、バスケットボール部に所属。体育は得意だった。医学部を目指し、高校3年は理系コースを選択。だが途中で心変わりして「隠れ文系」に。文化人類学を志望して大阪大学に入学。シドニーでのホームステイや、フランスの寺院巡礼を経験。

写真（中央）は高校時代。

★86年、阪大を卒業。国際会議・展示会の運営受託会社に入社。90年、社員有志約20人を含む働く仲間約40人とともに会社を出て、コングレを設立。

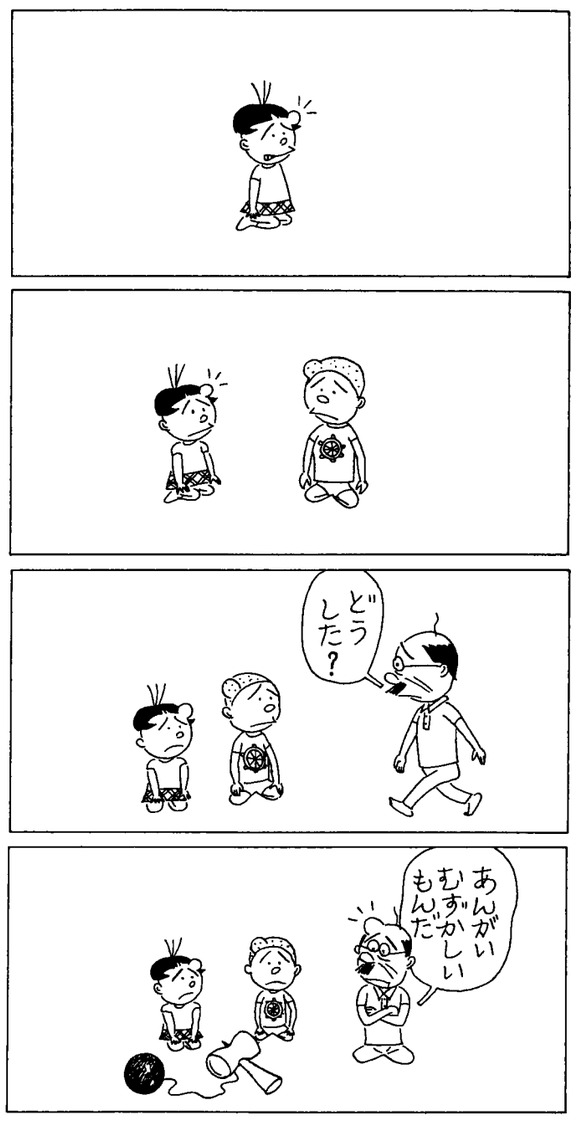
★91年日本医学会総会、94年国際エイズ会議、95年APEC首脳会議（大阪）、97年地球温暖化防止京都会議、2001年日中経済討論会と、大型国際会議の運営実績を重ねていく。

★13年、隈﨑守臣氏（14年死去）の後を継ぎ、社長に就任。国内外10カ所に事業拠点を置き、社員数290人。グループ会社6社。15年、業界団体「日本コンベンション協会」を設立し、代表理事を務める。

◆次回は、水中文化遺産の専門家で、日本で初めて大学院で「海洋考古学」の授業を始めた東京海洋大学教授の岩淵聡文さんの予定です。

サザエさんをさがして

sazae-san



1969年6月10日朝日新聞朝刊　©長谷川町子美術館

けん玉　大正期に改良、人気遊具に

ワカメに続き、カツオもこぶをつくってしょげかえる。凶器の正体は特大けん玉。でも、波平までとは……。往年のわんぱく小僧も面目丸つぶれだ。少年時代にけん玉で遊んだことがなかったのだろうか!?

けん玉の歴史をひもといてみる。

日本独自のものと思われがちだが、その起源は、16世紀のフランス国王アンリ3世（在位1574～89）の時代にさかのぼる。当時の書物に「1585年の夏、街角で子どもたちがよく遊んでいる『ビル・ボケ』を王様たちも遊ぶようになった」といった記述が残る。日本けん玉協会の堤早知子事務局長は「当時の『ビル・ボケ』は、シャンパングラスのようなカップに、毛糸を巻いた玉を糸でくくりつけて受けて遊んだようです」と解説する。

日本にお目見えするのは江戸時代後期。江戸の風俗習慣をまとめた随筆『嬉遊笑覧』（1830年）に「安永6、7（1777、8）年の頃拳玉と云もの出来たり」と記され、けん玉という遊具が登場。受け損ねたら酒を飲ませる「罰ゲーム」もあって、大人の酒席の遊びだった。

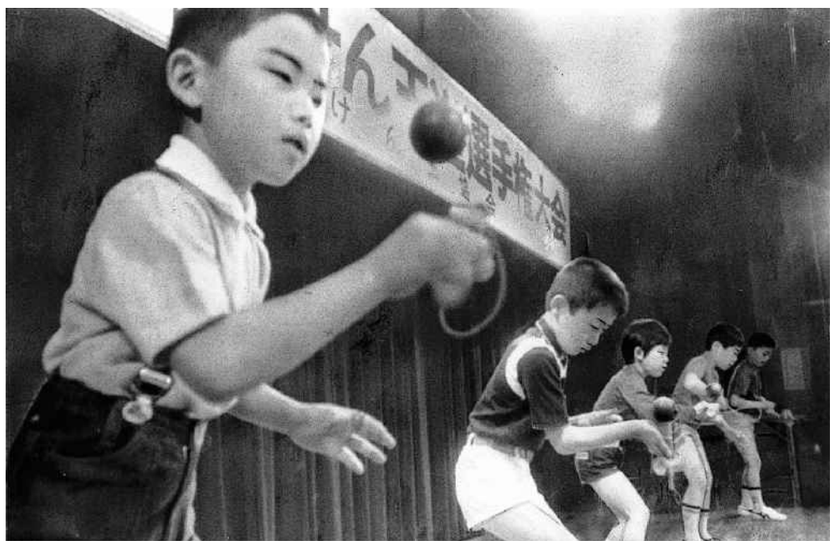
日本で子どもの遊びになったのは明治時代。1876（明治9）年、文部省が出版した英国の児童教育書の翻訳本『童女筌』の中でけん玉が「盃及球」（カップ・アンド・ボールの訳）の名で女の子が遊ぶ図付きで紹介されたのをきっかけに、子どもたちの間に徐々に広まっていったという。伝来からほぼ100年間は、日本でのけん玉は大人の世界のものだったことになる。

サザエさんの漫画にもある現在のけん玉の形になったのは大正時代。広島県呉市の江草濱次さんが1918（大正7）年に、従来のものに大小二つの皿を鼓型につけた形を考案。翌年、「日月ボール」の名称で、実用新案として登録された。同じ県内の廿日市市の木工業者に依頼して製造が始まったとされる。同市が「けん玉発祥の地」とされる由縁だ。

そして70年代、けん玉に一大ブームが起きる。記者も小学生時代、プラスチックのけん玉で「もしもし亀よ♪」を口ずさみながら大皿中皿を往復する練習をしていたのを思い出す。75（昭和50）年には、童話作家藤原一生さんが、日本けん玉協会を立ち上げ、ルールを統一、段級の認定を始め、スポーツとしての側面も生まれた。79年には第1回全日本けん玉道選手権大会が開かれている。

その後、テレビゲームなどに人気を奪われて下火になっていたが、ここ10年ほどの間に人気が再燃し、「KENDAMA」として世界で脚光を浴びている。米国の若者が日本から持ち帰ったけん玉をヒップホップ系の音楽に合わせ、自由な発想で技を繰り出す様子を動画サイトに投稿したのがきっかけで大ブレーク。BMX（バイシクルモトクロス）やスケートボードなどストリート系スポーツをする若い男性に「クール（格好いい）」と人気急上昇中だ。

若者ばかりではない。けん玉は脳も体も若々しくなる――といった波平にとっての朗報も。『脳が目覚める！ けん玉レッスン』（主婦と生活社）を監修した白澤卓二・順天堂大学教授は、けん玉歴20年以上もある男性（94）の脳を磁気共鳴画像装置（MRI）で診断したところ、萎縮も病変も少なく50～60代に相当する元気な脳だったことに驚いた、という。白澤教授は「けん玉は、手先を使うことで脳が活性化し、認知機能を保つため、ボケ防止の効果がある。ひざをリズミカルに屈伸させる全身運動でもあるので老化防止にもってこいです」と話す。日本けん玉協会も「東京五輪に向けて魅力を世界に発信したい」と、けん玉体操を考案中だという。（進藤健一）



川崎市で開かれた第1回全日本けん玉道選手権大会。約200人の愛好家が技の正確さを競った＝1979年

サザエさんのベスト版『よりぬきサザエさん』の全13巻が好評発売中です（税込み各1080円）。
ご注文は書店、ASAまで。詳細はhttp://publications.asahi.com/yorinuki/へ。

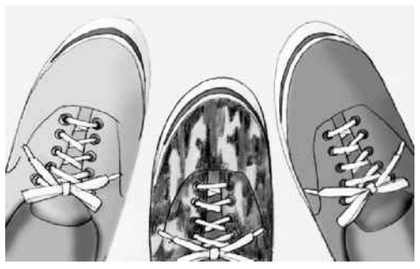
ことばの食感

中村 明

世代によるすれ違い

同じ部屋をさすのに、家族の年齢によって三つの呼び方が行き交っているという話を聞いたことがある。祖母は「お勝手」と言い、母は「台所」と言い、自分は「キッチン」と呼ぶと、その女子学生は笑いながら話してくれた。息子は卓球をしているつもり、親はピンポンをしているつもりで、親子のラリーが続いても不思議はない。

子供と親とがそれぞれ「帽子」と「シャッポ」、「コーデュロイ」と「コール天」、「小麦粉」と「メリケン粉」と言って話が通じ合う家庭もありそうだ。一方、娘に「パンツ姿」で外出すると言われて、あわてて止める母親もいるかもしれない。同じ単語から思い浮かべるイメージが年齢によってまったく違うからだ。



イラスト・麻柴朋貴

「カーキ色」という語がどんな色かで、商品の売買に行き違いが起こったという話も聞く。「カーキ」はもとインドのヒンディー語らしく、土ぼこりの意味という。年齢の高い層では、旧日本軍の軍服の連想が強く、黄色みを帯びた茶色のイメージとなるが、若年層では外国の軍服を頭に浮かべるのか、この語から緑がかった茶褐色を連想するようだ。そう頭に描いて注文して届いた商品の色が、気に入らなかったのだろう。（早稲田大名誉教授）